

読	ん	で	み	た	い
こ	の	一	冊		

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 町田光弘



『大不平等 エレファントカーブが予測する未来』

●ブランコ・ミラノヴィッチ著 立木勝訳 みすず書房 (3,200 円+税)

世界は、BREXIT、移民排斥の動きなど、ポピュリズムの拡がりの中で揺れ続けています。

本書は、その背景を理解し、将来を考える上で最適な一冊です。問題提起として重要なのは、横軸に世界の所得分布を、縦軸に1988年から2008年における実質所得の累積増をとったグラフです。これは、象が鼻をもたげた姿に似ていることから「エレファントカーブ」と呼ばれ、本書の表紙上にも示されています。

ベルリンの壁崩壊からリーマン・ショックまでの20年間に、所得が大きく増えたピークが二つあり、それは象の鼻先にあたる世界で最も豊かな上位1%と、所得が上位から40~50%の人たちです。グローバル化の勝ち組は、世界の超富裕層と中国など新興アジア諸国の中間層です。さらに、世界的にみると所得が上位20%前後に位置したものの、それぞれの国の所得分布では下半分に属する欧米や日本の「豊かな世界の低位中間層」では20年間に実質所得の増加がほとんどなく、最大の負け組であったことが示されています。

本書は、グローバルな不平等化を考察する上で各国内の不平等と各国間の不平等に分けて論を進めています。1820年には、グローバルな不平等のうち、80%は各国内での差から生じ、社会階級が重要でした。しかし、1970年頃にはグローバルな不平等の80%はどこで生まれたかで決まるようになっていきます。コンゴではなく合衆国で生まれたというだけで、その人の所得は93倍になるのです。しかし、過去10年間に場所の重要性は低下しつつあります。社会階級については、現代は、資本家と労働者が分離しておらず、豊かな者も働いている「新しい資本主義」にあり、それが格差を拡げる要因となります。

各国内の不平等の考察には、国が工業化して平均所得が伸びるにつれて最初は不平等が拡大し、その後は縮小するとする「クズネッツ仮説」が下敷きになっています。ただし、これを単なる逆U字型曲線ではなく、前工業化社会から脱工業化社会までの長期の歴史の中で考察することで、「クズネッツ波形」と捉えるのが本書の特徴です。中国は、第一の波のピークを過ぎたあたりで、これから不平等は縮小する、一方、合衆国は1世紀以上も前に第一の波を過ぎ、現在は第二

の波のピークに近づきつつあるとみています。

豊かな国がクズネッツ波形の第二の波を上がっていくときには不平等が拡大しますが、その最も有害な影響のひとつは、中間層が空洞化してくることです。その報復が、大衆による階級的な反乱で、ポピュリズムや移民排斥へと変容します。不平等の水準を押し下げるには、戦争、自然災害、疫病などの「悪性」の力と、教育へのアクセス拡大、社会的移転の増加、累進課税などの「良性」の力がありますが、それらを認識することで、「世界戦争という大変動を不平等という病の治療薬にせずに済む」ことが何よりも大事です。

グローバルな不平等の観点では、貧しい国々の所得が豊かな国に追いつくことが重要です。貧しかった中国の成長は、グローバルな不平等を収束する力を持ってきましたが、平均所得が高くなり世界人口の半分以上が中国より下という水準になると、逆に、中国での成長の継続がグローバルな所得不平等を拡大の方向に導きます。それ以後は、インドが、グローバルな所得平準化の主要なエンジンになるとしています。

本書の最後に著者は、「グローバリゼーションが続くことで不平等は消滅するか?」と問い、「しない。グローバリゼーションの利益は均等には分配されないだろう」と答えています。グローバル化はメリットが大きいですが、「不平等」が重要な負の側面であることを認識し、どのように対処していくべきかを考えていかなければなりません。

原著は2016年、邦訳は2017年ですが、今年も激動が予想される世界情勢の動きを理解する上での必読書です。まだお読みでない方は、是非一読されることをお勧めします。

【著者略歴】ルクセンブルク所得研究センター上級研究員、ニューヨーク大学大学院センター客員大学院教授。世界銀行調査部の主任エコノミストを20年間務める。著書『不平等について』（みすず書房、2012年）ほか。

【訳者略歴】翻訳者。訳書 アルメンダリスほか『マイクロファイナンス事典』（明石書店、2016）ほか。